

小学校体育科における「主体的・対話的で深い学び」に資する ICT の効果に関する一考察

—G.H.ミード自我論に依拠しつつ—

甲斐 義一・森下 覚・谷口 勇一

A Study on the Effectiveness of ICT for Active Learning in  
Elementary School Physical Education :  
From the Perspective of G.H.Mead Theory

KAI, G., MORISHITA, S., and TANIGUCHI, Y.

大分大学教育学部研究紀要 第44巻第1号

2022年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 44, No. 1, September 2022

OITA, JAPAN

# 小学校体育科における「主体的・対話的で深い学び」に資する ICT の効果に関する一考察

—G.H.ミード自我論に依拠しつつ—

甲 斐 義 一\*・森 下 覚\*\*・谷 口 勇 一\*\*\*

【要 旨】 本研究は、小学校体育科における「主体的・対話的で深い学び」に資する ICT<sup>1)</sup>の効果について、ミード理論の視座から検討し、明らかにすることを目的とした。ICTを用いてバスケットボールの学習を行った小学 5 年生の児童 32 名に対し、質問紙調査を行った。その結果、モデルを共有したりモデルとのズレを捉えさせたりすることで問題的状况を生み、児童の主体性を活性化させる ICT の効果が見出された。

【キーワード】 「主体的・対話的で深い学び」 ICT 体育 ミード自我論 主体性

## I はじめに

### 1 問題関心

中央教育審議会(2016)では、変化が大きく複雑で予測困難な社会において、子どもたちが新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育むための学習指導要領のあり方として、「教員が何を教えるのか」ではなく「子どもたちが身に付けるべき資質・能力」を示すものへと改善する必要性が指摘された。さらに、その実現のため、学習する子どもたちの視点に立ち、教育課程全体を通じて「何ができるようになるのか」という観点から育成を目指す資質・能力を整理し、その上で「何を学ぶか」という指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶか」という子どもたちの具体的な学びの姿を考える必要があるとした。こうした文脈において、「どのように学ぶか」という学びの質の改善に関わって示された視点が、「主体的・対話的で深い学び」である。これは、子どもたちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである(中央教育審議会, 2016)。これを受け、「小学校・中学校学習指導要領(平成 29 年度告示)解説総則編」(2017)では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、学校の ICT 環境の整備と ICT を活用した学習活動を充実させる必要性が明記された。

---

令和 4 年 5 月 20 日受理

\*かい・ぎいち 大分大学教育学部附属小学校

\*\*もりした・さとる 大分大学教育学部附属教育実践総合センター

\*\*\*たにぐち・ゆういち 大分大学教育学部芸術・保健体育教育(保健体育)

こうした経緯から、「主体的・対話的で深い学び」や、その実現に資する ICT の効果について、授業レベルで検討する必要性が生まれ、多くの事例が報告されている。長野・小林 (2021) は、ICT を活用した授業モデルを提案し、中学校での実践をもとに、「情報収集し考えを広げたり修正したりする能力の向上」や、「資料をまとめたり発表したりする能力の向上」、「話し合いを促進させる」、といった ICT の効果について論じている。また、藤本ほか (2017) は、小学校理科の「川の働き」の授業において「主体的・対話的で深い学び」を促進する教師の働きかけについて検討しており、ここでは、教師の、「お出かけ」や「探検調査隊」などの意欲を喚起する発話や、「チームで相談」や「チームで掛け声」といった協働を促し話し合いの手順を示す発話が、その実現に有効であることが示唆されている。

さて、上述のとおり、「主体的・対話的で深い学び」を展開していくためのツールとして期待が高まる ICT であるが、とりわけ、体育科での活用の期待は大きい。

令和 3 年度小学校及び中学校各教科等担当指導主事連絡協議会においては、「運動の二極化」や「体力の低下」、「主体的に課題解決に取り組む学習の不十分さ」といった課題を ICT の活用が解決しうるものとし、3 つの資質・能力の観点から期待できる効果として、「運動の行い方の理解や技能の習得」、「自己や友達の課題の発見や練習方法の工夫・改善」、「友達との教え合いの充実や、自己の変容の確認」が挙げられている。これまで、教師の言葉かけや試技、具体物の教具だけでは伝えられなかった動きの捉えを可能にし、児童が主体的に考えたり友達と対話したりする中で解決を図るという学習展開を可能にする ICT は、体育科においてまさに、「主体的・対話的で深い学び」実現のキーと言える。松坂 (2014) は、教員志望の大学生を対象とした「逆上がり」の授業実践において、iPad を用いて師範の動画を見せたり、動画の撮影と再生の機能を用いて「やってみる」ことと「考える」ことを繰り返したりすることで、運動イメージの形成や教え合いやコミュニケーションの促進へとつながり、「できる」だけでない「わかる」授業が実現されると報告する。また、高柳ほか (2014) は、小学校 5 年生を対象とした跳び箱運動の授業におけるタブレット PC 利活用の効果について、「ウォッチングタイム」という自己の運動の状態を客観的に捉える時間で利活用させることで、運動イメージが持ちやすく意欲が高まったり、動きの違いの認識から教え合い等のコミュニケーションを促進したり、技能の向上に役立ったりする効果があると述べる。

しかしながら、こうした事例では、「技能の向上」や「思考と対話の促進」といった、学びの結果や学び方の変化が ICT 活用の効果として挙げられているものの、実際の学習場面で ICT を用いた教師の働きかけがいかんして児童の「主体的・対話的で深い学び」を喚起したのかについては論じられてはいない。よって、「学習場面において『主体的・対話的で深い学び』を喚起する ICT 活用の効果とはいかなるものか」や、「いかなる学習状況を『主体的・対話的で深い学び』とするか」については、検討の余地があると思われる。

## 2 研究目的

以上の問題関心を踏まえ、本研究では、体育学領域において、従来、スポーツ競技者の社会化（個人の成長）の過程における主体性を分析する際に用いられてきた、G・H・ミード（ジョージ・ハーバード・ミード：以下「ミード」と略す）自我論を援用したい。ミード (1973) は、人間の自我は「他者の態度に対する生物体の反応」としての「I（主我）」と、「他者の態度（と生物体が想定しているもの）の組織化されたセット」としての「Me（客我）」の相互作用によ

って構成されるとする。そして、船津（1983）は、このミードの理論における「Me」に対する反応ないしは反作用という「I」の機能が、取りも直さず主体性であるとし、これによって個人の社会（他者）に対する自律的な関わりが可能になっているという。反応とは、個人がスムーズに「Me」を取得する際の「I」の機能である。一方反作用とは、「Me」が自己にとって敵対的なときの「I」の機能である。この反作用によって敵対的な「Me」を修正・変更・再構成するといった、個人による積極的な社会への働きかけが可能となる（吉田，1992）。

実際の学習状況と照らし合わせれば、児童にとって「教師からの問いかけ・発話・資料提示等」が「Me」であり、それに対して児童が「I」の解釈作用を働かせることで学習状況が成立していると理解できよう。「教師からの問いかけ・発話・資料提示等 Me」が、児童にとって分かりやすくスムーズに取得されるものの場合、児童は「反応」という「I」の機能を働かせることとなり、学習状況はスムーズに進行する。しかしながら時に、「教師の問いかけ・発話・資料提示等 Me」は、児童にとって「わからない・難しい」といった敵対的な「Me」となり、児童はこうした問題状況において思考や対話を行いながら「I」の反作用を働かせることによって、敵対的な「Me」を修正・変更・再構成し、問題状況の解決を図ると考えられる。このように、ミード自我論を用いることで、教師と児童による相互作用の動的な過程とその手段としての ICT の効果を、「主体性」という観点から把握することが可能となると思われる。

以上のことから、本研究では、小学校体育科における「主体的・対話的で深い学び」に資する ICT の効果について明らかにしていきたい。その際、ミード自我論を援用し、具体的な学習状況でいかなる教師の働きかけ「Me」が児童の「I」を活性化させ主体的な学びを喚起したのかについて分析することを目的とする。

## II 方法

### 1 対象者及び対象とする授業

#### 1) 対象者について

任意で選出された、A 小学校 5 年生の児童 32 名を対象者とした。A 小学校は A 県内にある小学校で、全校児童数は約 600 名。学力調査や日常の学習状況等からわかる学年の児童全体の傾向として、思考力・判断力・表現力が高く、学習意欲は非常に高い。反面、学習への見通しが持てなかったり、内容が苦手なものだったりする場合に意欲を持って学ぶことが難しい場面も見られた。また、休み時間には多くの児童がグラウンドに出て外遊びをするなど、同校の他学年児童と比較して、運動への関心・意欲は高い傾向にある。対象とする学級の担任であり、対象授業を実施した教師は、教職歴 16 年である。教師は小学校から大学までサッカーに取り組んでおり、サッカーの公式審判員のライセンスを有している。指導者としてサッカーをはじめ様々な競技に携わるなど、競技者としても指導者としても豊富な体育・スポーツ経験を有している。当該年度は体育科の担当で、運動会の全体指揮を行なった。授業が行われた 2021 年 11 月の学級の様子を「(先月の運動会の団体競技の) 綱引きで勝ったこともあり、まとまってきた」とするなど、体育的行事によって集団としてのまとまりが培われ、良好な人間関係づくりが行われてきた時期でもあった。

A 小学校で一人一台端末や高速通信環境等の ICT 環境が整えられたのは、2021 年度のはじめであり、当該年度は本格的な ICT 使用の 1 年目であった。しかしながら、日常的に家庭等で

ICTに触れる機会は他の学校の児童より比較的多いように思われ、情報活用能力については総じて高い傾向にあった。

## 2) 対象とする授業について

授業については、ICTを活用した体育科の授業で、教師と児童が活用の意味や効果を豊富に見出していそうなバスケットボールの授業（2021年11月30日実施）を選定した（図1）。教師が児童に身につけさせることをねらった資質・能力は、「パスを受けるためのボールを持たない時の動き方」であった。全7時間の単元の学習計画は、「①試しのゲームを行い学習の見通しをもつ」「②簡易のルールでゲームの行い方を知る」③パスを受ける動きについて考える」「④みんなが楽しめるようルールを工夫する」「⑤パスのもらい方や出し方を工夫する」「⑥チームに合った作戦を考える」「⑦作戦を立てながらバスケットボール大会を楽しむ」である。単元全体を通して児童とともに目指した目標（めあて）は「パスをつないでバスケットボールを楽しもう」であった。教師によれば、「これまではパス、ドリブル、シュートといった個々の技能を練習の中で積み上げた後、ゲームを行うという学習展開を行なってきた」が、「問題解決的な展開を目指すため、まずはゲームの全体像をつかませ、繰り返しゲームを行う中で、自分たちの課題を見つけ改善していくような展開へと変更した」と、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」になるよう、意図して学習計画を立てていた。

また、調査対象とする授業は、単元全体の3時間目にあたる「③パスを受ける動きについて考える」時間であり、簡易化したルールを理解した児童が「パスをつないでバスケットボールを楽しもう」という単元のめあてに本格的に向かっていくはじめの時間である。ICT活用の場面は、学習活動の「2. 本時のめあてを確認する」と「3. ゲームを行い自分達の動きを見直す」である。45分間の具体的な指導の流れは、以下の通りである。

図1 授業の様子



























